グルメ記事におけるオノマトペ

星野　祐子
十文字学園女子大学　短期大学部

要旨

グルメ雑誌を資料とし、使用されるオノマトペの形式、それらの機能・表現効果を分析した。まず、読者層の異なるグルメ雑誌を横断的に用いて「食」に関わるオノマトペを収集した。その上で、グルメ雑誌ならではの表現に注目した。特集号を組むことも多いグルメ雑誌には、同じページの中に、似通った料理が複数掲載される。そこで、微妙な違いや感覚を読み手に伝えるために、一般的な用法から逸脱したり、新奇で臨時的な響きを用いたりと、表現のバリエーションを増やしていることが明らかになった。続いて、オノマトペの説明力に注目した分析を行ったところ、オノマトペは、その響きをもって内容を簡潔に伝えることができることが理解された。グルメ雑誌においては、複数のオノマトペを連続して用いることで読み手に「感覚の追体験」を促したり、共有されている「感覚のスケール」を手立てに感覚を細かく指定したりと、その表現力を活かした描写がなされていた。

【キーワード】　オノマトペ、グルメ雑誌、感覚の追体験、感覚のスケール

1　はじめに

「食」に関わるオノマトペは、あらゆるメディアで確認される。最近は、商品名そのものに食感をイメージさせるオノマトペが採用され、「食」に関わるジャンルにおいて、オノマトペの使用は、非常に効果的であることがうかがえる。

ことにグルメ雑誌には、その食感や味覚をより鮮やかに伝えようとする意識が感じられる。たとえば、あるテーマのもと編纂されたグルメ特集の場合、類似の食材・既存の食品との差別化を図るために、その表現には様々な工夫が求められる。また、限られた紙幅の中で、読み手の印象に残り、感覚的でわかりやすく、インパクトのある表現が要求される。

こうした編集側のニーズに応える表現こそが、豊かな描写力を持ち、造語力が高く、感覚的な伝達を可能とするオノマトペなのではないだろうか。そこで、本稿では、グルメ雑誌やグルメ特集のオノマトペを収集し、食感や味覚をより正確に伝えることが求められる状況において、どのようなオノマトペが選ばれているのかを確認する。また、いくつかの例を手がかりに、説明言語としてのオノマトペの有効性を論じたい。最後に、日本語教育の場において、食についてのオノマトペを学ぶ意義について考える。

2　先行研究

まず、本稿で扱う「オノマトペ」の定義について述べる。ここでは、田守・スコウラップ（1999）、田守（2002）、山口（2007）などに従い、擬声語・擬音語・擬態語の総称を「オノマトペ」とする。

オノマトペに関わる先行研究は多々ある。スコウラップ・田守（1993）は、オノマトペ

の描写力について早くに注目した論文である。また、英語との比較を通じて、オノマトペの形態的、意味的な特徴を記述した研究に、田守・スコウラップ（1999）がある。田守・スコウラップ（1999）では、オノマトペは、受け手に臨場感を伝え、微妙な感覚の描写を可能にすると指摘する。

最近の研究では、オノマトペの体系性について論じる角岡（2007）や、隣接領域の知見を援用しオノマトペ研究の拡がりを示した篠原・宇野編（2014）があり、研究の深まりがうかがえる。また、身近な例を引きオノマトペの豊かな描写力を紹介する入門書としては、田守（2002）、桜井（2010）などが挙げられる。辞典類としては、飛田・浅田（2002）、山口（2003）、小野（2007）がある。以上が、オノマトペ全般に関わる研究成果である。

続いて「食」とオノマトペについて論じた研究をみてみよう。武藤（2003）は、「食」とオノマトペについて体系的な研究を行い、「食」の形容においてオノマトペが有用であることを示した。また、大橋＋シズル研究会（2010）は、6 年間の定量調査を経て、食品と使用されたオノマトペの関係、使用傾向を明らかにしている。

このように、オノマトペの研究は多様であり、「食」についての研究もみられる。ただ、オノマトペの使用が、テクスト内においてどのような意味、機能を持っているのか、具体的なテクストの中で検証した研究はみられない。豊かな描写をもったオノマトペが、時代の最先端をいく雑誌にどのように活用されるのか。本稿では、グルメ雑誌・グルメ特集というジャンルに限定し、オノマトペの特徴的な使用を取り上げる。

3　資料について

今回扱った資料は、本稿末に示した[1]。購買層や扱う内容などを考慮し、様々な雑誌・特集を用例収集の対象としている。用例収集にあたっては、雑誌の全ページを対象にした数量的調査も行ったが、紙幅の関係で、ここでは傾向を述べるに留めたい。

先行研究で既に指摘されているように（武藤 2003、大橋＋シズル研究会 2010）、今回のデータにおいても、食感を表す表現が多用された。特に、フワ系、サク系、カリ系は、異形を含めて頻用されていた。いずれも、商品のネーミングに採用されるくらい、身近な響きを持ち、その食感をイメージしやすいオノマトペであるといえる。

4　分析

今回は質的な分析を中心に紹介する。まず、食を形容するオノマトペがどのような特徴を持っているのか、具体例をもとに示す。続いて、グルメ雑誌ならではの個性的なオノマトペを紹介する。娯楽としての側面を持つ雑誌において、オノマトペはどのような文脈で使用されているのだろうか。また、情報を効率よく伝えなければならないという制約の中、オノマトペは、どのような意図で用いられているのだろうか。

4.1　食についてのオノマトペの分類

武藤（2003）には、食を形容するオノマトペに関して、網羅的なリストが掲載されている。武藤（2003）で挙げられたリストには、当該オノマトペから連想される食品名も掲載されており、オノマトペと食品が強い関連性を持つことが示唆される。

さて、今回収集したオノマトペをみてみると、いわゆる一般的な使用の逸脱が、豊かな

描写を可能にしていることがわかった。食の記述に力点を置くグルメ雑誌だからこそ、印象的で使い古されていないオノマトペを使うことが予想される。以下、特徴的な表現を取り上げるにあたって、場面や形容対象の異なりを考慮し、3 種に分けて紹介する。①料理（菓子・飲料を含む）の形容、②食べ方の形容、③料理場面での形容、の 3 種である。

4.1.1　食品（菓子・飲料を含む）の形容

味覚、視覚、聴覚、嗅覚、触覚（食感）の五感、全てに関わるオノマトペを抽出することができた。言い方を変えれば、食品の「美味しさ」は、五感全てで感じるものである。

（例 1）**こってり**スープと**あっさり**餃子でミラクルが起きます。（資料①）
（例 2）**バリッ**、**ザクッ**のシュー皮に感動（資料⑤）

例 1 は味覚を、例 2 は食感を表わしている。これらの知覚器官での知覚を表現したオノマトペ以外には、食後の感想を述べることで美味しさを表すもの（例 3）、味覚の到達や口内での味の広がりを好ましいものとして表現するもの（例 4）が確認された。

（例 3）レモンの酸味とクリームの甘さが絶妙で、**さっぱり！うっとり！**（資料⑤）
（例 4）長芋、わさび、ねぎ、海苔、だしをからめると肉の甘味が**グン**と増し…（資料③）

先に、資料に関わる説明において、食感を表すオノマトペが多用されていることを述べたが、たとえば「サクッ」の場合、コンテクストの支援を受け、基本義プラスアルファの意味を伝達していることがわかる。

（例 5）早速、卓上の酢醤油に特製の胡麻胡椒を加えたたれにつけて、頬張る。薄皮で**サクッ**とした食感（資料①）
（例 6）中がウエハースなので**サクッ**と食べられるのもいい（資料④）
（例 7）歯が**サクッ**と入り込み、香ばしい風味の奥からタケノコの若々しく豊かな香りが口いっぱいに広がった（資料②）

例 5 は、軽い食感を表すという本義的な使用であるが、例 6、例 7 については、軽く食べられる、その食感が心地よい、というプラスアルファの意味を感じとることができる。それは、「食べられる」「入り込む」という動詞と共起することで、読み手は、その食感を追体験するよう誘導されるからである。

続いて、コンテクストの影響を受け、臨時的な解釈を許すオノマトペを取り上げる。

（例 8）（バタークリームのケーキは）**ギラギラ**した天然色のくどくど感が、昭和 30 年代のいかがわしさにマッチして戦後を呼び覚ます！（資料②）
（例 9）「うちの餃子は**ぎらぎら**じゃなくて、あっさり系だから、数を食べてもらえる。」（資料①）

通常「ギラギラ」は光を強く発するものを形容する表現であるが、例 8 の場合は、「くどくど感」と共起し、洗練されていない色を表わしている。さらに、例 9 に至っては、「あっ

さり系」と対比され、しつこい味、濃い味という、味覚の表現として用いられている。なお、例 9 の「ぎらぎら」は、店主のことばとして掲載されており、このような臨時的な解釈を許す使用は、話しことばにおいて生まれることをうかがわせる。

4.1.2　食べ方の形容

食べ方そのものを形容することで、食品の美味しさを伝えるパターンがみられた。例えば、食べ方に勢いや力強さを感じる「ガッツリ」「モリモリ」「ペロッ」「ペロリ」などがある。例 10 は肉まんの説明である。

（例 10）魅惑の匂いが立ち上って鼻腔を刺激すると理性はあっけなく崩れ去り、いてもたってもいられずに**ハフハフ**、**ガブリ**。（資料⑦）

例 10 では、「ハフハフ」で熱がりながらも味わう準備をし、「ガブリ」でかぶり付くという一連のプロセスを、読み手に追体験させている。

4.1.3　料理場面での形容

料理場面での形容については、一般的なオノマトペが並び、特異なものはみられなかった。料理方法を示す際には、表現の面白さよりわかりやすさが優先されるからであろう。

4.2　個性的なオノマトペ

前節では、グルメ雑誌にみられるオノマトペを用途別で分類した。ここでは、一般的な使い方とは異なる個性的なオノマトペを紹介する。例 11 は、和菓子屋の店主を紹介している場面である。この店主の台詞にオノマトペの造語力の高さをうかがうことができる。

（例 11）包みながら、このきんとんは水分が多くて**あわあわ**しているので気をつけてな、と微笑んだ。（資料④）

小野（2007）では、「あわあわ」は「余裕を失って、ものが手につかないさま」を表すとされる。ところが、ここでの「あわあわ」は「水分が多くもろい」という意味を伝達する。「あわあわ」が「泡」からの連想であるのか、それとも本義から連想されるものかは判断できないが、オノマトペの型（ABAB）が、「あわあわ」がオノマトペであることを保証している。続いて取り上げる例 12 は、描写される料理と使用されるオノマトペとのギャップが、表現としての面白さを伝え、インパクトを与えることに成功している。

（例 12）アメリカ産プライム USDA ビーフ。焼き目はしっかり、カットすると**ウルッ**とした赤身肉が登場。（資料③）

山口（2003）でも小野（2007）でも、さらに一般的な理解においても「ウルッ」から連想されるのは「涙」である。そうした「ウルッ」がビーフの形容に使われていることで、読み手は、表現としての意外性を楽しむことができる。また、涙がこぼれ落ちるという動的な表現の使用により、切り口から肉汁が溢れ出してくる様を、想像することができる。

4.3　オノマトペの説明力

臨時的なオノマトペについては、使用されたコンテクストを手がかりとして、読み手がその都度解釈することが求められる。中には、初見であったり、類推が難しかったりする表現もあるだろう。しかし、読み手はそうした響きをむしろ楽しんでいるといえる。だからこそ、オノマトペがこれほど生活に浸透しているのだろう。

今後は、使用されたオノマトペとその表記との関係や、ターゲットとする読者層と使用されたオノマトペとの関係について考えてみたい。また、オノマトペについての言語学的な研究成果を、日本語教育に活かせるように、実践を積み重ねていきたいと考える[2]。

謝辞：
発表当日はフロアの先生方に有益なコメントを頂戴しました。記して感謝いたします。

注.

[1] 資料 ①『dancyu』（特集：餃子の王道）（2014・5）プレジデント社／②『dancyu』（特集：甘い生活）（2014・6）プレジデント社／③『dancyu』（特集：ときめきの肉）（2014・8）プレジデント社／④『クロワッサン』（特集：じつは、お菓子が大好き）（2000・7・25）マガジンハウス／⑤『OZ magazine』（特集：HAPPY スイーツグランプリ発表！）（2005・3・28） スターツ出版／⑥『anan』（特集：私の好きなスイーツ）（2014・5・21）マガジンハウス／
⑦『Meets 新手みやげを買いに』（2010・10・22）京阪神エルマガジン社

＜参考文献＞

岩崎 典子, ヴィンソン デイビッド,ヴィリョコ ガブリエラ（2005）「擬音語の感覚：英語母語話者と日本語母語話者のとらえ方の比較」南雅彦編『言語学と日本語教育 IV』pp.233-246,くろしお出版.
大橋正房＋シズル研究会（2010）『おいしい感覚と言葉』BMFT 出版部.
小野正弘編著（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館.
角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ 語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版.
桜井順（2010）『オノマトピア―擬音語大国にっぽん考』(岩波現代文庫)岩波書店.
篠原和子・宇野良子編（2014）『オノマトペ研究の射程―近づく音と意味』ひつじ書房.
ローレンス・スコウラップ（1993）「日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの分布について」筧寿雄・田守育啓編『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』pp.77-100, 勁草書房.
田守育啓（2002）『オノマトペ―擬音・擬態語をたのしむ」岩波書店.
田守育啓, スコウラップ ローレンス（1999）『オノマトペ―形態と意味』くろしお出版.
飛田良文・浅田秀子（2002）『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版.
三上京子（2007）「日本語教材と擬音語擬態語」『日本語学』26 (7), pp.36-46, 明治書院.
武藤彩加（2003）「第 9 章　味ことばの擬音語・擬態語－食のオノマトペ」瀬戸賢一編『ことばは味を超える－美味しい表現の探求』pp.241-300, 海鳴社.
山口仲美（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社.
山口仲美（2007）「擬声語・擬態語」飛田良文他編『日本語学研究事典』pp.145-146, 明治書院.